

「清水半平と橋爪玄惟」を読んで

櫻田喜貢穂（7組）

ついに同郷の畏友宮原豊(9組)が作家デビューを果たした。上梓したのは『信州上田藩 宝暦一揆・異聞「清水半平と橋爪玄惟」』という歴史小説である。

同じ青木村出身で、ともに歴史に関心があり、東京青木会（青木村出身者の故郷の会）では会長と副会長として「故郷の歴史同好会」のメンバーに名を連ね、故郷の歴史を肴に飲酒 歓談してきた仲である。だから、数年前から宮原君の関心が宝暦一揆の謎－隠された真実－にあることはわかっていたし、宝暦一揆を題材に小説を書いていることも知っていた。

7月初め、いよいよ宮原君からゲラがメール添付で送られてきたのだが、どういうわけか 仕事がやたらに立て込んでいて、なかなか読み進めることができなかった。すると、8月23日、紙の本として出版されたので、早速購入し、読んでみた。驚いた。なんと一気に読めるほどに面白い「小説」だった。

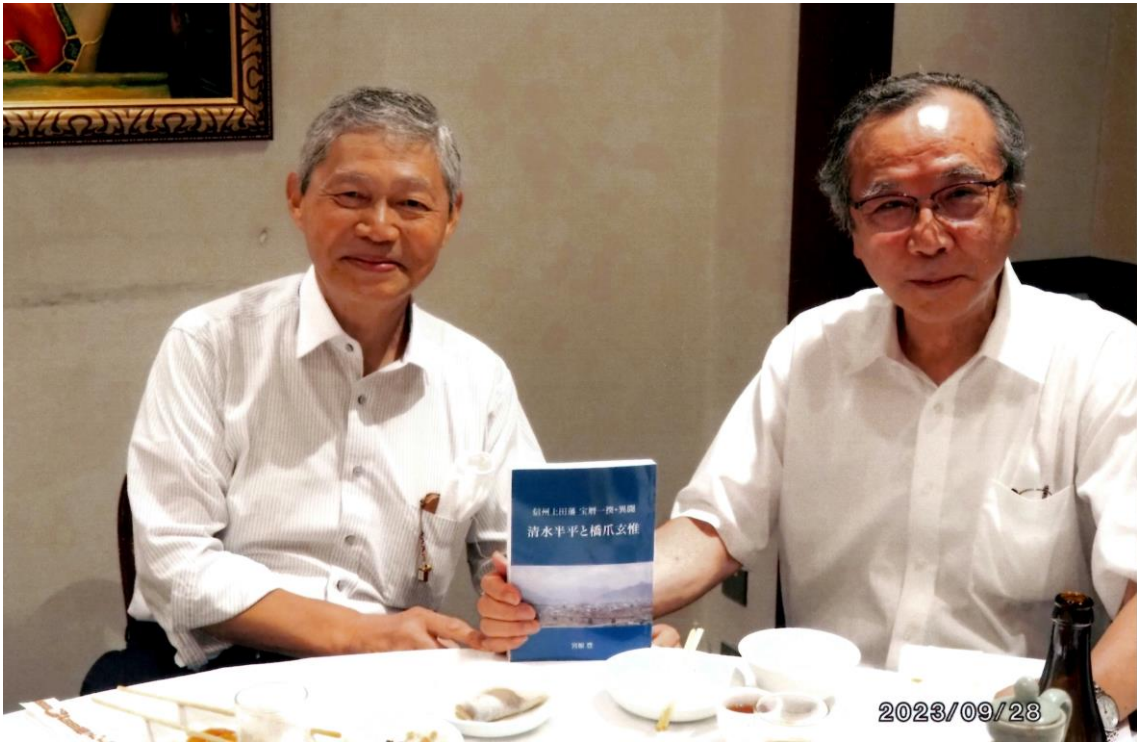
私は、宝暦一揆についても、一揆の時に実在した人物についてもひととおりの知識を持っている。史実のどこに「謎」があるかもある程度は認識していた。この謎の空白を宮原君は鮮やかに埋めていく。宮原君の推理力、想像力、創造力に感嘆の声をあげた。これは謎に挑んだ力作である。

とりわけメインの二人（半平と玄惟）の人物造形は素晴らしい。この二人の同志の絆が全編を貫いている。半平と玄惟を取り巻く人物も二人の人格と見事に調和している。二人の人間性が、同志愛、家族愛の形で表現されている。何度か涙をぬぐった。愛がてんこ盛りの人間ドラマである。

歴史小説としても、一揆という形で抵抗せざるを得ない社会経済状況が描かれ、守る側である上田藩権力の構造及び実態に言及し、両者のぎりぎりの攻防の果ての抵抗運動としての一揆の姿がダイナミックに描かれ、作品に深みを与えている。

そして何よりも宮原君らしいのは、それぞれの地位や立場で誠実に生きる人間に対する温かいまなざしである。一読されることをおすすめします。

（2023年9月29日記）



本を手にする宮原君（左）と筆者（櫻田）

以上